



LA NOUVELLE

N°8

PRINTEMPS

東京外語仏友会
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10
本郷サテライト 東京外語会気付
発行責任者 神奈川孝子 (昭37)
2012.4.1 発行

ワインとシャンソン - 2011 サロン報告 -

仏友会会長 神奈川孝子 (昭37)

毎年ボジョレ・ヌヴォの解禁日に合わせて本郷サテライトで行うサロン仏友会は、いつも好評である。去る11月19日、会員の小幡君枝さん(昭和53)(写真)を講師として、Kimie Petit Concert「シャンソンと私」を企画した。

君枝さんは、「フランス語で歌うシャンソン歌手」として、ここ数年、ライブハウスやホテル、船上クルーズのディナーショウなどで活躍していて、仏友会には沢山のファンがいるので、サロンにはふさわしいと常々考えていた。ただ心配なのは、会場がサテライトの殺風景な一室(もとは30人用の教室)、ピアノが無い、天井が低くて音の響きがどうだろうかということであった。君枝さんに相談すると、「大丈夫。伴奏はピアニストにキーボード持ってきてもらうから。」と請け負ってくれた。その後、素晴らしい実行力でプランを作り、私達にも相談してく



れて、当日を迎えた。

生憎の雨天であったが、約60名の会員がぎっしり。現役の学生(男子)3名も来てくれた。そんな中、素敵なおドレス姿の君枝さんは、ご自分の歩んできた道を話しながら、その時々エピソードに合わせて、懐かしいシャンソンをたくさん披露してくれた。「中には歌うのが好きな人もいるはずだから、歌唱指導して」とあらかじめお願いしておいたものだから、最後の方には皆で声を合わせて一曲歌ったのも、とても楽しく、好評だった。さすがにライブ活動で鍛えられた君枝さん、トークも上手で、ずいぶんと笑わせてくれたし、マル秘エピソードも特別にご披露してくれたりして、和やかな笑いの中、第一部が終わった。彼女は特別に声を張るタイプの歌手ではないので、かえって小さなスペースで、観客とごく近いところで歌うサロンの雰囲気にはぴったりで、当初の私の心配は杞憂であった。

喉が渇いた60人は8階に移動、第二部のボジョレ・ヌヴォ

を楽しむのはじまり。君枝さんを囲んで今年のボジョレの味も、特に新酒(=フルーティ、あっさり)という感じではなく豊潤で、女性幹事中心のグルメグループの手作りオードブルと合っるととても美味だったことは言うまでもない。

2001年秋から始めたこのサロンは今年で16回を数える。初めの頃は年2回のこともあったが、2007年から年1回、ボジョレ・ヌヴォ解禁に合わせて11月第3週に固定した。講演の内容は、初めの頃の外国事情、国際問題などの少し硬いもの(6回)から、言語に関するもの(4回)、ファッション(2回)、そして映画、音楽、ワイン話、シャンソンと変わってきて、いかにもフランス語科らしい傾向である。

毎年楽しみに集まってくれる会員も60名を越えると、母校の施設であるこのサテライトでは、いつも手狭である。もう限界かと思う。使い勝手も決して良くない。これからの課題かと思うが、この楽しい集まりはいつまでも続いてほしい。

《異彩のOB》

新潟在住の上原誠己さん(昭和49年卒)をご紹介します。上原さんは浄瑠璃語りの演奏者です(芸名:五世鶴澤浅造、越後角太夫)。東京外語仏語科卒から日本の古典芸能への道、そしてDonald・キーン氏との出会いなどについて書いて頂きました。



筆者(Donald・キーン氏撮影)

文楽の研修生を募集するというニュースが入りました。師匠は、「本気でプロになりたいんやったら、二年間みっちり研修所でいろんな師匠から稽古してもらう方が、わしのとこでやってるよかえ

え、近道や、そうしい」ということでいつの間にかプロになるつもりになっていた私は昭和47年5月からは10名の仲間と共に文楽研修生第一期生となり毎日人間国宝クラスの師匠達から朝から晩まで語りや三味線、人形、日本舞踊に琴、胡弓、狂言や茶道に至るまで芸道三昧の二年間を送り、大学卒業と同時に研修所も修了し、師匠・重造に正式に弟子入りし五世鶴澤浅造(あさぞう)の芸名で初舞台を踏みました。

芸事は本来6歳から始めないものにならないと言われて来たのですが、なにしろ後継者不足でしたので20歳前後からでも意欲さえあればプロの門を叩くことが出来るようになった最初の頃でした。文楽の世界では15.6歳を過ぎると中年と言われました。私はまさしく中年でしたからもうもう脇目も振らず無我夢中だったと思います。脱落者も多かったのですが私はなんとか一人前になりたい一心で稽古に励み師匠に仕え舞台経験を積むことに専心しました。今思えばそれなりに順調にキャリアを積んでいったと思いますが、28歳の時に発病したC型肝炎が原因で文楽の過密なスケジュールについていく自信がなくなり、平成9年47歳で後ろ髪を引かれる思いで文楽座を廃業退座しました。

幸い新潟の家は、兄が後を継いでいましたから新潟に戻り兄と共に家業に専念しました。芸事のことは完全に忘れていたのですが数年すると地元の愛好者などから教えて欲しいと声をかけて頂き、また根は好きだったものですから指先もウズウズとうずき始め月に一度教えることから初めて、平成18年には三味線の弾語りで地元や東京で独演会までも開いてしまいました。懸念だったC型肝炎も化学治療が功を奏して完治するという幸運にも恵まれいつの間にか浄瑠璃と会社員の二足の草鞋を履くことになっていました。

海を隔てた芸能の宝庫・佐渡には、義太夫節以前の浄瑠璃である文弥節が細々ながらも地元の人たちによって継承されていて、私は文弥節の持つ素朴で哀れな曲節に日本の音楽の源流を見る思いがしました。文弥節は芸能史の上では古浄瑠璃とか説経浄瑠璃とか言われるジャンルに属しますが、ここからまた私の新たな冒険は始まると言ってよいと思います。私は文弥節の昭和初期から後期にかけて録音された比較的信頼出来るような演奏や義太夫節に残る古い節などを参考にしつつ古浄瑠璃のある曲を全段作曲し、三時間近くを三味線の弾語りを行いました。その曲は、「越後國・柏崎 弘知法印御伝記」

という大英博物館にしか原本が残されていない、鎖国時代に出島から持ち出され数奇な運命を辿った孤本でした。

この古浄瑠璃の存在を教えて下さり上演を提案して下さいのがDonald・キーン先生でした。先生と私の接点は、日本文学についての碩学にして浄瑠璃に関しても多くの論文を著しておられる先生に助言を頂く為平成18年秋に新宿の講演会場の楽屋を紹介もなく訪ねたことが始まりでした。それ以来かつての懐かしい外語大に程近いお宅を訪ねご指導を頂き、又ニューヨークのお宅も何度もお邪魔するなど恐れ多い程にお近づきにさせて頂いています。先生から拝聴するいろいろなお話しは極めて貴重なお話ばかりで一人で聴くには勿体ないばかりです。

字数もほぼ尽きてしまったようですからこの辺で擱筆しますが、皆様の仲間には私のような変わり種もいることを恥ずかしながら取って自己紹介させて頂きました。

私の道は芸の道

上原誠己(昭49)

仏友会の為私のような劣等生が執筆するというのも甚だ場違いなのですが、外語大フランス語学科卒業の肩書を一応持つ私自身のことについて思いつくままに書かせて頂きます。実際に大学の授業に出席したのは正味一年一寸だったでしょうが、いまだに親しくしている同級生もいますし、愛校心となると妙なもので怠け者にも不思議と人並みにあるものです。

私は米どころ新潟の造り酒屋の次男として、今は新潟市に合併されましたが四方八方田圃に囲まれた自然豊かな農村に育ちました。後を継ぐ心配もなく屈託ない少年時代を自由にそして平凡に送ったと思います。大学に入学した年は異常な年でした。紛争の為入学式もなく大学の建物自体がバリエードで封鎖され半年位は学内にも入れない状態だったと記憶しています。授業が始まって休講が多く大学生活を送っているという気持ちとは程遠かったと思います。

そんな中で筋金入りの田舎者だった私は都会の文化生活に憧れていたからでしょうか、また受験戦争からの解放感からでしょうか、東京芸大に通っていた兄の影響もあり美術館、図書館、映画館、劇場などに通うことがなよりの楽しみでした。特に歌舞伎や文楽に魅力を感じ足繁く通うようになりました。最初の内は退屈で居眠りばかりだったのですが、いつの間にか身も心も奪われるようになりました。文楽の義太夫節には、その音楽性、緩急の差の面白さ、そして感情表現の豊かさ、洗練された完成度の高さ、経験したことのない古典の楽しさなどに魅せられてしまいました。聴いたり観たりするだけでは物足りなくなり国立劇場の楽屋へも行くようになり、大学二年(昭和46年)秋頃からは四谷に住む文楽の三味線弾きで後に私の師匠となる四世鶴澤重造(じゅうぞう)の元で語りや三味線の稽古を始めました。それまで私は三味線の素養は全くありませんでした。師匠は明治時代から修行してきた既に七十歳を超えた古老でした。掃除や小間使いなどの用事をしながらその合間の僅かな時間に稽古をつけてもらうことは真剣勝負の場でもあり、一対一の師匠弟子の雰囲気の中で修行を積むことは私にとってむしろ新鮮でした。

翌年になると、五月から後継者不足解消の為国立劇場で

2012 年度総会のお知らせ

日時: 2012年4月21日(土)
午後2時~ 総会、2時20分~ 講演
3時30分~ 5時 写真撮影&懇親会

会場: 大手町サンケイプラザ 201,202号室
(東京メトロ大手町 E1出口)

講師: 宮澤政男氏(昭56年卒)
キュレーター、明治大学非常勤講師

演題: 「バラから始まる西洋美術史」(仮)

宮澤さんは、この3月まで渋谷文化村のザ・ミュージアムで開催されていた「フェルメールからのラブレター展」のチーフキュレーターとして活躍されました。大学卒業後ご本人の人生を振り返り、西洋美術史との関係を中心に興味深い話をさせていただきます。

参加費: 5,000円、2012年度分通信費(1,000円)も同時に申し受けます。

申込: 4月5日まで
申込先: 神奈川孝子: mt-kana@mx6.mesh.ne.jp
Tel/Fax (03)3313-4310
富山 絢子: ANB73700@nifty.com

キャンパスから

『バイリンガルは当たり前』

フランス語専攻4年 林 謙吾

昨年9月にジュネーブへ到着し、不安しか無い中留学を始めて5ヶ月が経過した。生活にも慣れ、友人も増えた。物価の高いスイスでは、外に遊びに行くことはあまりなく、ホームパーティをしたり、家で勉強会を



林 謙吾君
雪のスイスの電車内で

したりして、自分が日本にいる頃と比べると質素だが楽しい留学生活を送っている。しかしもうその生活も半分終わってしまった。今こうして前半戦を振り返ると、自分の頭の中にあつたジュネーブとその実際との違いに気づく。さすがに、山、羊や牛、チーズやチョコレートという、いわゆる「スイス」が全てのイメージで無かったものの、やはり生活を始めて気づいたことも多くあった。一番大きな気づきは予想以上に多言語社会だったということだ。

ジュネーブには、赤十字社やUNHCRなど国際機関の本部が置かれている。それに加え、移民も多く、カフェやバスの中にいるとフランス語だけでなく、英語、スペイン語、中国語やトルコ語まで聞こえてくる。大学内でも、留学生が多いのでフランス語と同じくらい英語も使用されている。また、スーパーマーケットに行くと、商品のラベルが全て、公用語である独仏伊の三言語で書かれていることも気づく。このように、ジュネーブに生活しているだけで多くの言語に触れることができる。実体験として、春学期はスイスの第四の国語のロマンス語を学び、最近では中国人の友人から中国語を学び始め、私は多言語社会を満喫している。

このような多言語の中で生活していると、多くの人がバイリンガル以上であることにも気づく。自分の母語に加え、英語は当たり前で、それにもう一言語話せるという人もいる。それが普通なので、まだフランス語も英語も発展途中で、言語の壁を感じてしまっている自分がとても小さく思えることが当初は多々あった。大学の秋学期は自分のフランス語を早く上達させ、他の学生と同じ土俵に乗ろうとするので終わってしまった。しかし、少しずつ授業中に何か発言してみたり、些細なことでも質問してみたりすることで、次第に自分の存在をクラスに示せるようになり、クラスメイトとも仲良くなることができた。友人の中には自分と同様の留学生もいて、その割にとっても流暢にフランス語を話すので、まだまだ自分の未熟さを痛感するが、徐々に自分のレベルアップを自覚するようになったので、へこたれずに春学期も頑張っていきたい。もちろん遊びも忘れずに。

『フランス留学体験記』

フランス語専攻3年 神谷亜沙子

2010年10月～2011年7月の私のフランス留生活生活を振り返ります。

様々な環境・授業形態を経験したいと思い、前半はルーアンで民間の語学学校、後半はパリの大学付属学校に通いました。また卒論テーマである日本語教育の研究のため、現地の日本語教育機関で聴講もしてきました。留学中に気を付けていたのは、日本人コミュニティから距離を置くことでした。どこに行っても日本人はいましたが、滞在を最大限に活用するため、フランス人・外国人と接する機会を常に探していました。おかげで人脈も広がり語学力も向上し、10か月という長いようで短い滞在でしたが、非常に充実しておりました。

まずルーアンではAlliance françaiseで会話を中心に学びました。

ここは印象派の画家達が描いた街で、私のホストマダムは「ルーアンは芸術の街だ」といつも誇らしげに言っていました。着いた時点で知り合いは皆無だったのですが、学校が小さく雰囲気も非常に和やかだったので、先生とも tutoyer で話し、他クラスの生徒とも仲良くなれました。この学校では定期的に excursion を行っており、私もモンサンミッシェルやバイユー、サンマロ等に行き、マカロン教室や旧市街散策にも参加しました。カルバドスやシードルの試飲もできたのはさすがノルマンディーです。



神谷亜沙子さん
ソルボンヌ文明講座卒業式

2月にはパリに移り、パンテオンのすぐ横にあるソルボンヌ文明講座に通いました。ルーアンとは全く違ってクラスが大きく、文法の授業に加えて音声学とフランス文化が学べました。パリには知り合いが多くいたので様々な恩恵を受けました。住居は17区にあるフランス人の友人の実家に間借りし、まさにブルジョワな生活を味わいました。また友人の父親が主催する地方のカーニバルの手伝いで絵描きに扮し、山車を引いたことも貴重な経験です。クリスマスは別の友人の実家にお邪魔して、本場のノエルを体験しました。他にも、英国大使館でテニスをしたり、マンションの屋根に上って革命記念日の花火をみたり、大きな別荘で新年を祝ったり、ペタンクをしたり、マルセイユまでヒッチハイクしたり、友人達のおかげで得た貴重な体験は数え上げればきりがありません。

今回の留学は周りの人の協力無しには成功しなかったでしょう。温かく私を送り出してくれた両親、受け入れてくれたホストファミリー、指導してくれた先生達、常に刺激的な体験を提供し続け、支えてくれた現地の友人達に本当に感謝しています。

小幡君枝さんのシャンソンを聴いて

— 第16回サロン仏友会 —

都築秀之 (昭36)

秋の仏友会は「ボジョレを楽しむ会」でもあり毎年楽しみにしているが、今年は小幡君枝さんのシャンソンを聴けるというおまけが付いていた。

外語出身のシャンソン歌手がいると神奈川夫妻に誘われて恵比寿の「アートカフェフレンズ」で初めてキミエさんのシャンソンを聴いたのが2年前、昭和52年卒にも関わらず張りがあつて温かみのある声でなつかしいシャンソンの名曲を聴かせて頂き、すっかりとりこになってしまった。

今回はキミエさんご自身の半生を振り返りながらのコンサートで10曲ほどを唄われたがいずれも学生時代に「シャンソン喫茶」に入り浸って聴いた懐かしの曲ばかりだった。

外語大に入ってはじめてシャンソンと出会った事、南仏プロバンス大学に留学した時のエピソード、就職、そして結婚、子育ての時代を経て又シャンソンと再会し、今はライブ活動をしたり、シャンソン教室を開いて楽しみながら歌っているというキミエさんの姿がそのまま滲み出ていたステージだった。「枯葉」、「ラ・メール」、「詩人の魂」、・・・などかつては口ずさんだ曲ばかりで密かにハミングしてしまった。今は陶芸家になっている吉村君がジョルジュ・ブラッサンスに夢中になってよく唄っていたな、などと思いだしながら・・・

今となっては演歌が似合う私だが、ボジョレを飲みながらシャンソンを聴くという楽しみも大事にしていきたい。

キミエさん、今後もご活躍下さい。



「今年は何べら」

— 2011 外語祭フランス語劇を観て —

松本伸夫 (昭38)

大学正面入り口そばの異文化交流会館「アゴラ・グローバル」で2011年11月22日フランス語科2年生が制作・上演した語劇『ベルサイユのばら』を神奈川孝子仏友会会長、相馬寿美乃副会長とともに観賞した。

通称『ベルばら』は、宝塚歌劇団の舞台化で大成功した池田理代子さんの漫画作品。フランス革命期を舞台に、架空の男装の麗人、オスカルの軍人、市民としての活躍と死に焦点を当てた1時間半の舞台だが、登場人物が35人を超えるにぎやかさで、満員の観客を飽きさせなかった、特に時代背景がベルサイユ宮殿のルイ16世王妃、マリー・アントワネット最盛期だけに、登場人物の舞台衣装が階級に関係なく豪華絢爛で、簡素な舞台上で映え、演出を取り仕切った平岡幸人代表の優れた手腕が読み取れた。

出演者も男装してきらびやかな衣装の近衛連隊長と衛兵隊長役が良く似合った上原琴子さんやオスカルの幼馴染で彼女をひそかに慕うアンドレ役の黒瀧清之介君の市民兵らしい動き、さらには革命派新聞記者役の則武匠君の元気のよさが目にとまった。

閉幕後は出演者全員舞台衣装のまま交流会館前に勢ぞろいして仏友会役員と記念撮影(写真右)。恒例により神奈川会長からお祝い金として3万円が平岡代表に手渡された。



昔日の青春「佛友會々報」

80年のタイムカプセルを開ける 3

坂井英俊 (昭40)

茶色に変色した昭和7年からの会報である。世代の異なる我々から当時を遠望すれば、黒い戦雲に覆われた空が見えるばかりで、いやおうなしに、まずは暗い時代への想念を語り紡ぐこととなる。が、こうして先輩方の苦しんだ日々を偲ぶのも遠い後輩なればこそその、愛惜の情からであろうか。

「上海事変のさなかドテラ1枚で孤軍奮闘、めざましい活躍をした褒美でローマへ派遣、上海へ栄転・結婚」とは、まるで満州に暗躍した「大陸浪人」の武勇伝めいた話であるが、苛烈な国家大事の最前線で協働した、これはただならぬ報告なのである。そもそも「上海事変」とは、それまでの欧米列国に倣った、今度は日本軍による侵略であったこと、罪なき貧しい人々のささやかな家族愛をも引き裂き、無数の老幼婦女子の命をも奪い去った国家暴力であったという苦い歴史を、後世の我々は学んでいる。

戦後のTV放送で旧関東軍少佐・T本人が明言し今では周知の史実となっていることだが、「満州の件で列強がうるさいから(国際都市)上海でコトを起こせ」と関東軍高級参謀・Iより命を受け、中国人を雇って罪のない日本人僧侶5名を殺傷させた後「日本人の生命財産を守る」を口実に立て、三箇師団増援を得て空・陸から中国十九路軍と一般市民・老若男女あわせて1万名(2万とも)を殺戮したとされる。剛直一徹な日本の若者たちは幼少からの教えを胸に「忠烈なる

護国の鬼」と化して「七生報国」を誓いながら、8000名余が先を争って殺し・殺され「散華」していったという。「大日本帝国」の歴史に恥じる蛮行・度重なる統帥権の侵害に憤る昭和天皇をさえ「蚊帳の外」にし、国民教育やマスコミをも牛耳っていたという当時の軍政権である、真相を知らぬ順良な国民の操縦など容易であったろう。

昭和恐慌と巨大な軍事出費とで赤貧にあえぐ日本国民は、国を挙げての不吉な行進であるとは知るよしもなく、愛する者の戦死を嘆きながらも祖国を信じ、涙ながらに「上海事変・戦勝祝」の提灯行列に加わったのではなかろうか。日本人のみなが信じた「日本は絶対負けぬ」と「神風は吹く」も、「天津波・原発事故は絶対起きない」と同質の、いたましい日本的?集団妄想だったのだろう。先輩・非力な学生たちの知性が、これにどこからどう関わりえたであろうか。

「日本人は一語で言うなら軽薄」と山田風太郎は戦後の日記に記す。が、日本人はでなく我々とは言い、さらに「人類は」というべきではなかろうか。ひとり日本に限らず、人命を手段として消耗するそれまでの欧米列国の非道な侵略の歴史、その凄惨な実態は、とうてい筆舌にはつくしがたい。

強国がムシのよい横取りを「正義」と改名し自国に都合のよい「世界平和」をふりかざすという筋書きは、人類史の古代より今日に至るまでいささかも変わっていない。どの国を見ても明らかのように、軽薄であることのなかった国家や民族が、そして国民を騙さなかった戦争などというものが、人類の歴史にあったためしがあるだろうか。また個人良心の発露を圧殺する、

戦争という国を挙げての逸脱行為は、あとから「他人事のように」誰かを裁けば済むように簡単なことからはではない。

異文化・宗教間の価値観やモラルに整合性を見出すことには当然の困難があるが、世界共通の倫理規範が確立され、その実践を全人類が一途に望むという世にでもならぬかぎり、何も変わりはないだろう。モラルを破るのは常に人間のエゴであるが、エゴあればこそその生命であり繁栄でもあるとするなら、人間がそれを捨て去ることは至難である。だが、ここではせつかくの学問が、富が、災いの種にしかならず、月を追って走る子供のような人類に、永久平和は降りてこない。だが人たるもの、心底には友愛・信頼への強い悲願を秘めていることも、信じられることではないだろうか。この悲願を共通倫理の中核に据え人類規模で実践へ向かうという、世界の精神史を塗り替えるような知性の大道が、いつかは見えてくるのであろうか。「国家は弱肉強食、世界平和は夢想である」などと冷笑した曲者も、我が祖国の壊滅や愛する者たちの無残な死を嗤うことは、到底できないはずである。

遠い先輩方の万感の思い、苦悩が、歳月を超えて、いまま茶色い会報の行間に湧き上がって来るように思えてならない。さて、当時の学生生活はどうであったのだろう。まことに気の滅入るような陰々滅々たる黒雲の下にも、じつは小さな花が咲いていたし、暗い海底にも清楚な真珠は輝いていた。わが外国語学校先輩方の哀切ながらも青年らしい明るい心。それが、いま時空を超えて我々にも見えてくるのである。

(次回へつづく)